あやかし祓い屋の旦那様に嫁入りします

ろいず Roizu

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

目次

麗らかな春にお嫁入りしました　5
第一章　盗泉　9
第二章　火車　138
第三章　神降ろし　241
祓い屋〈縁〉の妻　312

麗らかな春にお嫁入りしました

春の暖かい日差しの中を白い馬の背に揺られ、白無垢姿のわたしは桜の花びらが舞い散る神社の境内を、夢うつつに進んでいた。
ゆっくりと歩く馬の赤手綱を、花婿である黒い着物の男性が引いている。
そのとてもゆったりとした揺れと日差しの心地よさに、わたしは眠気と戦っていた。
まだ婚儀の前だというのに、花嫁が眠りこけてしまうなんて、あってはならない。
ああ、しかし……眠いものは、眠い。
明日が結婚式だと思うと、昨夜は結局一睡もできなかったのだ。
この春の心地よい暖かさが、わたしを眠りへと誘っていた。

「……め、どの」

「……嫁殿」
「花嫁殿。そろそろ、起きられよ」
膝を揺さぶられ、わたしは「ふが……？」と、寝ぼけた声を出した。
わたしを揺さぶった人は、少し困った顔をしているのだと思う。
だと思う……というのは、その相手である花婿は、口から上の素顔が見えないからだ。四角い白い布で顔の半分を隠している。
ただ、口調や雰囲気から、この人がどのような表情をしているかが分かる。
「あら？　わたし、寝ていましたか？」
「ええ、少しだけ。もう祭壇の前です。馬から降りられる準備を」
祭壇ということは、境内からここまでそれなりの距離があったはずだから、五分以上は確実に夢の中にいたようだ。
彼は口元に笑みを浮かべ、こちらに手を差し出す。
わたしはそこに手を重ねた。
「お手数をおかけいたします」
「よく眠られていたので、式の間は眠気はないと思いますよ」

「もう、意地悪ですね」
「ふふっ、花嫁殿が寝るとは思いませんでしたから」
気恥ずかしさに愚痴るが、彼は穏やかに笑ってわたしを馬から降ろしてくれた。
彼に手を引かれ、もう片方の手で白無垢の前身頃が地面につかないように持ち上げて歩く。
軽く摘まんでいるように見えて、実はとても重い。走って祭壇に行き、一秒でも早くこの重たい白無垢から手を放したいぐらい、指先は悲鳴をあげている。
けれどそんなことは許されず、ようやく婚礼を挙げる祭壇にたどり着いた。
祭壇の両側には、それぞれの親族が並んで立っている。
まるで能面を張り付けたような両家の人々。せっかくの祝いの門出だというのに、笑い一つありはしない。
普段は口やかましいわたしの両親ですら、今はまるで他人のようだ。
ああ、本当に、一族の命運をかけた大義を押し付けられてしまったのだと実感する。
「花嫁殿。ぼうっとしていると、手順を間違えてしまいますよ」
「はい。すみません」

小声で花婿とやり取りをする間も、神主が祝詞を口にし、式は恙なく進行していく。
口を濡らしただけの御神酒は味すらわからなかったが、わたしは桜舞う美しい春に嫁入りした。
祓い屋〈縁〉の八代目コゲツの妻に、わたしはなった。

第一章　盗泉

近隣に建物もない郊外のとある場所に、その古い瓦屋根の一軒家は建っている。灰色のブロック塀に囲まれた、小さな庭があるだけの、なんの特徴もない二階建ての家だ。
玄関のガラス戸にかかった木の表札には『一』とある。
『一』と書いて、『ほし』と読む。
普通では見ない読み方をする、珍しい苗字である。
わたしはこの一軒家で、一ミカサとして、一コゲツという二十七歳の夫と暮らし始めた。
「嫁殿、起きられたか？」
黒いサラサラとした腰まである長い髪を赤い紐で結い、白い布で顔の上半分を隠した背の高い青年は、形の良い唇で優しく笑ってみせる。

この青年がコゲツ。わたしの夫だ。

痩せているが筋肉もきちんとついた体を、白いシャツと黒いスラックスに包んでいる。

輪郭から、白い布の下は標準より整った顔をしているのではないかと思っているけれど、残念ながらわたしはコゲツさんの素顔を知らない。

コゲツさんを見上げて、わたしも小さく笑った。

「はい。おはようございます」

「おはよう、嫁殿。朝食の準備ができていますから、参られよ」

彼はそれだけ言うと、部屋を出て階段を下りていく。

それを見送ってから、わたしは肩まで伸びた髪を二つに結んだ。制服の小鹿色のブレザーに、赤と茶のチェックが入った同色のスカートを着る。そして学校指定の白い靴下。白色以外は駄目で、許されるのはワンポイントの刺繍くらいだ。

顔に布をつけた素顔のわからない夫に対し、妻のわたしは平凡な十六歳。

結婚したばかりのわたし達は夫婦としてはまだ距離があるけれど、コゲツさんのおかげで、わたしは高校へ通うことができていた。

わたしの一族の本家は水島と言い、分家の江橋家がわたしの実家だ。

元々、本家や他の分家の親族とは、お正月に顔を合わせるだけの関係だった。年始に水島家に集まり、水島家当主の挨拶を聞いている間に、旅館に出てきそうな料理が配膳される。それを行儀よく食べて帰るのが通例だ。

幼い頃は同年代の従姉妹達もいたはずだけれど、気付けば水島家の屋敷に呼ばれる子供は、わたしだけになっていた。

ある年の集まりで、一族から一家に嫁ぐ花嫁探しが行われた。

花嫁を決める試験がどのようなものだったのか記憶は定かではないけれど、幼いわたしは難なく花嫁資格を得たらしい。

それ以来、水島家の屋敷に定期的に呼ばれ、十六になると同時に嫁ぐことが決定事項となった。

わたしが一家へ嫁ぐことが水島家を助けることになるらしいのだが、両親は「うちの娘がなぜ？」と猛反対していた。

しかし、本家に対して分家の力はないに等しい。

両親や親族達の間でどのような話し合いがされ、この縁談がまとまったのか、わた

しは知らない。
わたしが中学を卒業した十五歳の時、外国産の黒塗りの車が我が家へ来た。それを見て、一般のサラリーマン家庭が敵う相手ではないと悟った。その車で水島家へ連れて行かれ、わたしの花嫁修業が始まった。
これから高校に通うことはないだろうと、諦めて過ごす日々……
花婿になるコゲツさんは水島家を訪れては、デートと称してわたしを色々な場所へ連れ出し、息抜きをさせてくれた。
そして、わたしに高校受験を勧めてくれたのもコゲツさんだった。
水島家の当主に口利きをしてくれて、嫁入り後に、高校へ入学することができた。
「嫁殿。今日の弁当とハンカチです。持って行きなさい」
コゲツさんはピンクのチェック柄のお弁当袋と、紫陽花（あじさい）の刺繍が入った白いハンカチをちゃぶ台に置く。
「ありがとうございます」
頭を下げてカバンにお弁当袋を入れ、ハンカチを制服のポケットに入れると、彼の口元が綻（ほころ）ぶ。

コゲツさんが笑うと、雰囲気が春の陽だまりのように温かくなる。
物腰の柔らかな声は耳に心地よく、彼の声はわたしが好きなところの一つだ。
わたしのためにお弁当を作り、朝食を用意してくれる家庭的な面も、親元から離されたわたしに家族の温かさを与えてくれる。
コゲツさんは親切な人だ。
ただ一つ、文句があるとすれば……
「どうかしましたか？　嫁殿」
じっと見つめるわたしに、コゲツさんは少しだけ首を傾げる。
「あの、コゲツさん……その、口調を、変えませんか？」
「口調、ですか？」
コクコクとわたしは頷（うなず）いた。
「少しだけ、時代が古い？　堅苦しいかなって思って……」
今時の人と比べて、彼の口調は少し古風な気がする。
古典文学でも聞いているような時代錯誤の口調が、二十七歳にしては渋すぎると、わたしは常々思っていたのだ。

「ふむ。では、私も口調を改めましょう。ですから、嫁殿も私に気兼ねなく、普通の口調でお願いします。あと、私のことはコゲツと呼び捨てで構いません」
十以上年の離れた人を呼び捨てにしていいのか迷うところもあるけれど、夫婦なのだし、距離を縮めて仲良く暮らすなら、わたしも歩み寄るべきだろう。
「コゲツ……で、良いですか？」
「ええ。ゆっくり慣れていってください」
わたしの頭を撫でて、コゲツさん――コゲツは口元に笑みを浮かべる。
こうしたところは、水島家にいた十五歳の頃から変わらない。……子供扱いされている気がしないでもない。
「今日は、学校は何時ぐらいに終わりそうですか？」
「今日は六時限目まであるから、帰宅は十六時頃になりま……なるよ。コゲツは？」
「私は、いつも通りです」
「そうなんだ……」
コゲツのいつも通りは、よく分からない。
特に働いているようには見えない。けれど、わたしが学校へ行っている間にどこか

へ出かけている風でもある。
たまに学校から帰ると、お土産を買ってきてくれていて、それは県外の物が多い。
コゲツの服装が朝見たものとは違うこともあるから、気になるところではある。
でも、コゲツにつっこんで尋ねる勇気は、今のわたしにはない。
ただでさえ顔半分を布で隠しているような人だし、わたしが嫁ぐことで本家や親族の命運が左右されるというのだから、何かあることは分かる。
分かるけれど、あえてそれを聞いて、この現状が壊れてしまうことが怖い。
コゲツはわたしの夫。顔半分を見せないような人で、謎めいた人。
嫁入りに関して、不満は多々あった。
花嫁修業を強いられて、水島家の屋敷では座敷牢（ろう）のような部屋に押し込まれ、泣いてばかりの日々を過ごしていた。
そんなわたしを、コゲツは守ろうとしてくれた。
何やら影響力の強いらしい彼が何度も会いに来てくれたおかげで、水島家の人達の理不尽な厳しさは段々と減っていった。
高校へ行けるように手配をしてくれて、一年遅れでも入学できたのはコゲツのおか

げだ。

コゲツいわく、学生のうちは勉学に励むこと。

家事を一切わたしにさせないのも、それが一因。わたしをとても甘やかしている。

だから、わたしはコゲツとのこの甘く優しい日々を、不用意な一言で失いたくない。

思いがけない答えが返ってきたら……と思うと、何も言えないのが現状だ。

「嫁殿、夕飯は何を食べたい？」

「んーっ、コゲツの好きな物でいいよ」

「嫁殿の好きな物を覚えたい。だから、教えてほしい」

コゲツのこうした気遣いが、凄く好きだなぁ。

わたしを優先してくれるところは花丸をあげたいぐらい。

本当は素顔を突き合わせたいけれど、まだ一度も見たことがない。コゲツとわたしの間に線引きがされてしまっているようで、寂しいところだ。

いつかは見せてくれるだろうか？

好奇心は猫をも殺す……と言うし、今は我慢しておこう。

イギリスのことわざで、猫には九つの生があり、死んでも生まれ変わって次の生に

向かうのだという。そんな猫が、持ち前の好奇心で命を落としてしまうことから、人への戒めに使われる言葉だ。

好奇心でこの生活を失ってしまっては、元も子もないからね。

それに、コゲツの口元と雰囲気で、どんな表情をしているか見当はつくから、答えを焦る必要もない。

「じゃあ、カレーコロッケ。コゲツ作れる？」

「ええ。任せてください。今日の夕飯は、カレーコロッケを作っておきますね」

「楽しみにしているね」

頷いて口元に笑みを浮かべたコゲツに、わたしも笑みを返した。

学校が終わり、商店街のアーケード通りを抜けていく。

この商店街は、とにかく誘惑が多い。右を見ても左を見ても、食べ物を扱っているお店ばかりが並んでいるのだ。

特に学校帰りの十代は腹ペコで、成長期真っ盛り。

このアーケード通りは、お腹が鳴って仕方がない。

クレープ屋から漂う甘い香り、ハンバーガーショップのポテトを揚げる匂いに、たい焼き屋の香ばしい生地に餡子の匂い。

そこにお総菜屋さんの焼きそばのソースの香りが加われば、誘惑としてはもう最強ではないだろうか？

「ヤバーい！　お腹空いたぁ～」

わたしの横で、同じ高校の同級生、美空千佳がお腹を片手で押さえて騒ぐ。

千佳はボーイッシュな、ショートボブのスポーツ少女である。ただ、今は左腕に痛々しいギプスをしていて、運動は休止中。

女子サッカー部の活動中に派手にコケて折ってしまったらしい。それで激しい運動を禁止されて、帰宅部のわたしと一緒に下校となったのだ。

クラスの中で特別仲が良いとも悪いとも言えない関係。ただ帰る方向が一緒で、人懐っこい千佳が声を掛けてくれたという訳だ。

「ミカサ、何か食べて帰らない？」

「ううん。今日の夕飯はカレーコロッケだから帰るよ」

「うん？　何それ？」

「わたしの好物。だから今日はお腹を空かせておいて、いっぱい食べるの。空腹は最高のスパイスって言うじゃない？」

笑顔でその誘いを断ると、千佳は一人で買い食いに走ることに決めたようだ。

ハンバーガーショップの前で別れ、わたしはそのまま家へ帰る。玄関に入る前から仄かに香るカレーとコロッケの匂いに、お腹が鳴った。

「ただいまー」

「おかえり、嫁殿。手洗いとうがいをして、着替えたら味見をしてもらえますか？」

戸を開けるとすぐに台所からコゲツが顔を出した。わたしはうきうきと家に上がる。

「すぐに着替えてくるね！」

「まだ揚げたばかりですから、急がなくても……」

コゲツの言葉を「学生はお腹が空くの！」と遮って、急いで洗面所へ向かった。

手洗いとうがいをして二階に上がり、自分の部屋で普段着に着替えると、再び台所へ戻る。

この手洗いとうがいは、子供の頃から厳しく躾けられていた。

幼稚園や小学校でもさせられるものだけれど、うちの一族もコゲツの一族でも、度

を越した躾の一つがこれだったりする。
理由としては『不浄なものは手に付きやすく、口に入りやすい』から。
子供の頃に親戚で集まった時、遊んだ後に一人だけ手洗いうがいをしなかった子がいた。その子は両親と一緒に親戚の前で激しく叱られた。
あんなものを見てしまっては、親のためにも自分のためにも手洗いうがいは重要だ、忘れちゃいけないと、子供ながらに強く意識した。
やたらと厳しいけれど、その甲斐あってか、風邪は引きにくいほうである。
「嫁殿。一番初めに揚げたものをどうぞ」
「カレーコロッケ大好き〜。では、いただきます！」
コゲツが菜箸でコロッケを二つに割り、半分をわたしの口元へ持ってくる。
はふっと、まだ熱いコロッケにかぶりつき、手で口を押さえながら咀嚼した。
口の中に広がるカレーの風味と甘み、この甘みは玉ねぎだろうか？　粗挽きのひき肉はゴロゴロとした食感で、プッチリとした歯ごたえはコーンとグリンピースだろうか。
味もさることながら、食感が面白くて新鮮。

ソースをつけなくても味わいが深いのは、何か隠し味がありそうだ。
「コゲツ。これ、凄く美味しいよ！」
「それは良かったです。オーソドックスなカレーコロッケが今のもので、チーズ入りや半熟たまごの入ったものも用意してあります。夕飯に味わってくださいね」
「今まで食べたカレーコロッケの中で、一等賞かも」
「光栄です」
ただでさえこんなに美味しいのに、チーズ入りや半熟たまごのものまで用意するとは、お料理名人ではないかしら？
わたしも花嫁修業で家事スキルはひと通り叩き込まれたけれど、コゲツのひと手間かかった料理に敵うかは、正直に言えば微妙なところだ。
和風料理ばかりを叩き込まれたわたしに対し、コゲツは和風はもちろん洋風なものも得意だから、わたしの花嫁修業は必要だったかなぁ？　と、少しだけ思ってしまう。
「嫁殿。今日の宿題は？」
「うぐっ。小テストの間違いを直してこいというものが、あります」
「では、嫁殿の宿題が終わってから、夕飯にしましょうね」

「……はい」
ガクリと項垂れたわたしの口に、コゲツが残りのカレーコロッケを入れる。
コゲツに見送られて渋々ながら部屋へ戻り、カバンから小テストを取り出した。
ヒィヒィ言わされた受験がやっと終わったのに、まさか入学した後も勉強で泣くとは思わなかった。
花の女子高生ライフを満喫したかったけれど、理想と現実は違うようだ。果たして、学校帰りに遊んで帰る子達にはどこに宿題をやる暇があるのだろうか。
「高校でまで宿題があるなんて。中学までの制度だと思ったのになぁ」
しかも、中学では赤点をとっても進級はできるが、高校では進級できずに留年になってしまう。いつでもどこでも、勉強は真面目にしなさいということだ。
中学の頃は、どうせ卒業と同時に嫁入りで高校には行けないと思っていたから、勉強はかなりいい加減だった。
そのツケが今回ってきている。
いつ必要になるか分からないから、勉強はしないよりしたほうがいい。と、当たり前のことに気付く十六歳のわたしである。

「そういえば、千佳は買い食いして帰ったみたいだけど、あの手でちゃんと食べられたかな？　勉強も大変そうだし……」
小テストと英和辞典を交互に見ながら、現実逃避に千佳も宿題をしているかな？と、つい手が止まってしまう。
「嫁殿、お茶ですよ」
「あ、はーい。ありがとうございます」
コゲツが部屋に入ってきて、淹れ立てのお茶を手渡してくれた。
仄かに優しいこの香りは、玄米茶だろう。
わたしがお茶を飲むと、コゲツは机の上の小テストに目をやった。
「嫁殿は、英語は苦手ですか？」
「うーん。日本人なら日本語でオッケーって、思っているよ」
「その『オッケー』も英語ですよ。手伝ってあげますから、早く終わらせましょうね」
そんなコゲツの手伝いもあり、なんとか宿題は終わったものの、夕飯のカレーコロッケは冷めてしまっていた。コゲツがオーブントースターで温め直して、衣をカ

ラッとさせてくれる。
やはり、コロッケの衣はサクサクのカリカリが美味しいのだ。
「このカレーコロッケ、隠し味でも入っているの？」
「愛情、でしょうか」
ふふっとコゲツが笑い、頬が熱くなるのを感じながら受け流す。
ちなみに、このカレーコロッケにはウスターソースが入っているそうだ。だからソースをつけなくても、味わい深いらしい。

翌朝登校すると、朝礼後に担任と入れ替わるように副担任が教室にやってきた。
「少しの間、各自自習すること。自由時間じゃないから騒がないように。――一、職員室へ行くように」
「あ、はい」
クラスメイトの好奇の目に晒され、わたしは首を傾げつつ席を立った。
何か呼び出されるようなことをしでかしただろうか？
結婚していることはコゲツが話をつけてくれている。加えて、入学が一年遅れということもあり気後れしてしまって、地味で目立たない高校生活を送っていた。
呼び出される理由が思い浮かばない。
問題はないはずのこれまでの言動を思い返しては色々と考えてしまって、重い足取りで職員室へ入った。
「失礼します」
室内を見渡して担任を見つけると、その隣には中年の女性と警察官が二人いる。
副担任が「一です」とわたしを紹介すると、中年女性が鬼気迫る顔で詰め寄ってきた。
「うちの千佳はどこに行ったの⁉　貴女が一緒に帰ったのよね？」
「えっ？　千佳……ですか？　昨日の学校帰りなら、途中で別れてからは会っていませんけど……？」
うちの、ということは、この人は千佳のお母さんだろうか？
顔立ちは、あまり似ているとは言えない。千佳はとにかくサッパリした顔つきで、猫のようなツリ目をしている。目の前の女性は、あえて言えば狸っぽい、全体的にまん丸な感じで正反対だ。

千佳はお父さん似なのかもしれない。
「一さん。昨日、どこで美空さんと別れたか話してもらえる？」
「はい。商店街の、ファーストフードのお店が並んでいる通りのハンバーガー屋さんの前です。千佳が買い食いをすると言うので、そこで別れました」
別れた時間も思い出せるだけ話して、警察官が差し出したメモに簡単な地図を描く。
何かが起きたのだろうということだけは、わたしにも理解できた。
「美空さんが、家のことや学校のことで悩んでいたという話を聞いたことはある？」
「いいえ。千佳とは家族の話をしたことはありません。学校で悩んでいるという話も聞いたことはないです」
これは本当。お互いの家族の話はしたことがないし、そもそも、したくてもわたしからは言いづらくてできない。
十六歳で結婚しています……なんて言えないよ。
それに、不思議と千佳は家族の話を振ってこないし、話す内容の大半は学校の授業やクラスメイトのことばかりだった。
「交友関係で悩んでいたというような話は？」

「いつでも明るくて、誰とでも気さくに話せる子ですから、そういう悩みはなかったと思います」
一年遅れを気にしてクラスに上手く溶け込めなかったわたしに声をかけてくれるような子だ。千佳は人懐っこい犬みたいな性格をしていると思う。
「美空さんに、お付き合いをしている男性がいるという話はありましたか？」
「それはよく分からないです。けど……今まで部活で忙しくて誰かと付き合うような時間はなかったと思います」
母親や教師の前だから言わないが、千佳に好きな人がいることは知っている。
それも、この職員室の中に。
現代文を担当する天草悟先生が、千佳の意中の人だ。
眼鏡をかけた優しい雰囲気の先生で、気の弱そうな感じもあるけれど、教え方が上手で、とても心地のよい声をしている。
確か二十六歳ぐらいだっただろうか？
わたしが天草先生をチラリと見ると、心配そうに眉尻を下げてこちらの様子を見守っていた。

「部活ができなくて家出……なんてことはないよなぁ？」
「それはないですね。大会もないですし、一年生はボール拾いや雑用ばかりだからサボる口実ができてラッキーって、言っていましたし」
あっ、これは失言だったかも？　と、口元を手で隠す。周囲を窺うと、苦笑いが返ってきた。
最後に「このことは言いふらさないようにね」と念を押され、わたしは職員室から追い出された。
「千佳……。事件に巻き込まれた、とかじゃなきゃ良いのだけど……」
あの元気な千佳が、家庭や友人、恋人、部活動、他の何かに悩んでいたとは思えない。
まぁ、人のことだから全て分かる訳じゃないけれど、千佳は普通の女子高生だ。家出するタイプには見えないし、かといって、事件や事故かと考えるのは怖い。
しかし、もし事件だったら……左手の使えない千佳を誘拐するのは、簡単なことかもしれない。
「千佳、大丈夫かな」

廊下から外を見て、わたしは溜め息を吐いた。
何事もなく、千佳が顔を出してくれたらいいのだけれど……
なぜだか、非日常に触れてしまった気がした。

千佳の行方が分からなくなって、一週間が経った。
相変わらずの日々ではあるけれど、このところ教室では千佳の噂話が飛び交っている。
耳に入るヒソヒソ声に、勝手な話をと眉をひそめた。
千佳は明るく、クラスのムードメーカーだ。
そうだったはずなのに……同級生達は面白おかしく吹聴して回っていた。
『あの子、援助交際していたんだって』
『家庭環境が悪いって、中学の時に同級生だった子に聞いたよ』
『千佳の母親、継母らしい』
『男の家にいるって聞いたけどー？』
どこ情報よ？　と問い詰めたくなるような噂話ばかりだ。

「ホシさん。貴女、チカと仲良かったよね？」
ふと、今まで挨拶程度しか交わしたことのない女子三人組が話しかけてきた。
好奇心を隠せていないその三人を、わたしはジッと見つめ返す。
人が一人、しかもクラスメイトが行方不明なのに、何が面白いのだろう。
「わたしより貴女達のほうが、仲が良かったと思うけど？」
「えー？　うちらは普通に喋ってただけだよ」
「そうそう。一緒に帰ったりはしなかったしさ」
「チカって、誰とでも話すじゃん。あの子誰とでも仲良くなるから」
笑いながら否定する彼女達は、お互いに自分は関係ないと言わんばかりだ。
けれどわたしだって、千佳が腕を折らなければ、一緒に下校していたかどうかは分からない。それぐらい彼女達と大差ない、ただのクラスメイトという関係だった。
「それで、何が聞きたいの？」
そう問い返しながらも、わたしは彼女達から興味をなくしていた。わたしが机の上の教科書をカバンに入れ始めると、彼女達が引き留めるように口を開く。
「ホシさんさぁ、最後にチカに会ったんだよね？」

「何か知っていることがあったら、教えてほしいなぁ」
「大丈夫。内緒にするからさ」
この『大丈夫』も『内緒』も、きっと守られることはないだろう。
それに、無関心を装うクラスメイト達も、興味のないふりをしながら、わたし達の会話に聞き耳を立てているようだ。放課後だというのに、だらだらと帰る準備を長引かせて、一向に帰ろうとしないのだから。
「悪いけど、警察から何も話さないように言われているの。それに、知っていることは貴女達と変わらないから、気にするだけ無駄だよ」
わたしはカバンを手に立ち上がると、彼女達を無視して教室を出る。
背後からは密かなざわめきと「だから、あの子に聞いても無駄って言ったじゃん！」という声がした。
『人の不幸は蜜の味』と言うけれど、これ以上根も葉もないことを吹聴されたら、戻ってきた千佳は不愉快な思いをするだろう。
わたしもできた人間ではないから、噂話に興じる彼女達を正面から批判したり、その噂を否定して回ることはできない。

できることと言えば、精々、自分の口からは余計なことを言わないでおくことだけだ。

この一週間、千佳の件になんの進展もないことで、噂だけが独り歩きしている。そろそろ行方(ゆくえ)不明者として公開捜査が始まるかもしれない。ただ、高校生は家出の可能性が高いと見なされることが多いらしく、事件性が高くないとなかなか公開捜査に踏み切れないのだと、コゲツから聞いた。

コゲツがこうしたことに詳しいというのも新しい発見である。

「ただいまー」

玄関を開けると、見慣れない男物の革靴が揃えて置いてあった。

お客さんだろうかと、居間に顔を覗かせる。

コゲツと現代文の天草先生が向かい合って、何かを受け渡していた。

なんだろう？　小さな物のようだけど……

「おかえり。今日は早かったですね」

「あ、うん。学校が今日から、下校時間を早めるって……」

千佳の一件の影響だ。目が合った気がしてコゲツに説明すると、天草先生は一礼して静かに玄関から出ていった。

天草先生、何をしに来たのだろう？

「嫁殿、手洗いとうがいを。今日の宿題は？」

コゲツはお母さんみたいだ。わたしがもっと幼かったら、反抗しているかもしれない。

「今日は宿題はありません。この間コゲツに教えてもらった小テストと同じ問題が出たからね。間違えなかったよ」

「嫁殿の役に立ったようで、何よりです」

「コゲツには感謝しています」

わたしの頭をコゲツが撫でた時、もう一方の手の中の物がチラリと見えた。天草先生に渡されていた物だ。

それは、手のひらに納まる小さな木箱で、随分と古い物。何十年、下手をしたら何百年も経っていそうな、朽ち果てる寸前の年代もののように見える。

こんな物をなぜ、天草先生はコゲツに渡したのだろう？

わたしの視線に気付いたのか、コゲツは「ほら、早く手洗いとうがいですよ」と、

わたしを居間から追い出した。
尋ねてみたかったのに、この雰囲気から察するに、聞くなということなのだろう。
諦めて手洗いとうがい、着替えも済ませて居間に戻ると、コゲツの姿はなくなっていた。
「コゲツー？」
台所を覗いても、コゲツは見当たらない。
部屋にでもいるのだろうか？
わたしの部屋は二階にあるけれど、コゲツは一階の和室を自室にしている。夫婦といえどプライベート空間は必要だし、わたしがまだ学生というのもあって、部屋は分けているのである。
コゲツの部屋の前に立ったところで、本人が中から出てきた。
「嫁殿、どうかしましたか？」
「あ、ううん。コゲツ、どこに行ったのかなって思って……」
コゲツの口元を見ると、口角が上がっている。
「心配させてしまいましたね。出掛ける時は声をかけますので、安心してくださ

い。……という話をしたそばからすみませんが、今日は一人で食べてもらっていいですか。夕飯の支度はしてありますから」
「いいけど、コゲツどこかに出掛けるの？」
「ええ。仕事です」
「そっか……じゃあ、仕方がないね」
「嫁殿。一応言っておきますが、外を出歩いたりはしないように」
頭を上下に振って頷き、再びコゲツを見上げる。
コゲツはわたしの頭をポンポンと叩くと、白いシャツの上に黒いジャケットを羽織り、玄関に鍵をかけて出掛けていった。
それを見送って、わたしは台所で夕飯を食べる準備をする。
我が家の今夜の夕飯は『レンコンの海老ハーブ揚げ』だ。
すりおろしたレンコンに、海老のすり身、片栗粉と刻み青じそ、バジル、塩と砂糖を少々混ぜ合わせて、油で揚げたもの。片栗粉が入っているからふわっと、砂糖のおかげでしっとりもした食感。
「相変わらず、わたしが作るより上手なんだから」

カニカマと溶き卵の中華スープもトロミがあって美味しいし、クルトンと温泉たまごが入ったベビーハーブのサラダも、乾燥パプリカとオニオンが載っていて文句なし。

ほんのりと香ばしい味わいと、クルトンの歯ごたえもバッチリだ。

「これを、あと二年は味わえるのよね」

わたしは大学への進学は希望していないから、高校を卒業後は専業主婦になる。そうしたら、家事はわたしの役目になるのだ。

中学を卒業して十六歳になったら嫁入り、と決められていたから、今高校に行けているだけでも十分だと思う。

本家の水島家がコゲツの決定に逆らわなかったのもあり、わたしが高校へ通っていることに関しては誰も何も言ってこない。

当初わたしの両親は、とりあえず籍だけ入れて高校を卒業してから一緒に暮らすほうが良いのではないかと考えていたみたいだ。けれど、結局はコゲツのもとにいるのが一番いいという結論に落ち着いた。

その辺りの詳しい話はわたしは知らないのだけど。

「そういえば、お母さん達に連絡入れてないな……」

この家に引っ越してきてから、両親には片手で足りるぐらいしか電話していない。

嫁いだばかりの娘がしょっちゅう連絡を取るのもなんだか問題がある気がしたのと、新生活に手一杯だったのもある。

「あっ。スマートフォン、二階だ」

女子高生の必需品と言われるスマートフォンを持ち歩かないのが、わたしである。

中学時代も持ってはいたけれど、学校内では使用禁止だし、家に帰れば両親がいるから、必要になることがなかった。受験勉強で忙しい親しい友人達の邪魔はできなかったし、中学卒業と同時にわたしは花嫁修業を始めたので、自然と連絡を取らなくなった。

皆きっと高校で新しい友達ができたのだろう。

別にそれは悲しくない。ただ、そういうものなのだと諦めた。

だからわたしはスマートフォンに執着しておらず、持ち歩く癖がない。

「ご馳走様でした」

手を合わせてから、台所で食器を洗って片付ける。

二階へ上がり自分の部屋に戻ると、カバンからスマートフォンを取り出した。

通知なし。
スマートフォンの電話帳から『実家』の文字を探し、タップする。
数回コール音が鳴って、母が電話に出た。
『はい。江橋です』
「お母さん。ミカサだけど、元気にしてた？」
『あらミカサったら、どうしたの？　コゲツくんから苛めにでも遭った？』
「なんでコゲツがわたしを苛めるのよ。そういうことはありません」
コロコロと笑う母は相変わらずだ。
腕にヨークシャーテリアのピノンを抱っこしているのか、たまにヘッヘッと興奮した息遣いが聞こえる。ピノンは抱っこが大好きなので、嬉しくて仕方がないのだろう。
「お母さんとお父さんが元気にしているか気になっただけだよ」
『あらまぁ、ホームシック？　ミカサのところに行ってあげたいけど、遠いからねぇ』
「そういうのじゃないの。たまには声を聞かせておかなきゃって思っただけ」
うふふと笑うお母さんは、わたしの言うことを信じていないようだ。
確かに、お母さんの声を聞いたら少しだけ、会いたいとは思ったけど……

『そうそう。ミカサが前に気にしていた、コゲツくんとの結婚が決まった嫁探しの行事。多分これかなー？　っていうアルバムが出てきたのよ』
「本当⁉　送って！」
『なら明日にでも、そっちに送っておくわね』
「ありがとう。お母さん」
『じゃあ、テレビが良いところだから、またね』
娘よりテレビなの！　と、言いたいところではあるけど、わたしが花嫁に選ばれた行事は凄く気になっているから、写真が手に入るならありがたい。
明日送ってもらっても届くのに二日はかかるだろうから、焦っても仕方がないけど。
両親とわたしが住んでいる場所は、それだけ距離がある。
「花嫁選びかぁ……」
どんなものだったのか、わたしは幼すぎて覚えていない。
コゲツに聞いても「覚えていません」と言われてしまったのよね。
でも、コゲツのハッキリした口調から、むしろ絶対に覚えていると思う。
顔が半分隠れている分、コゲツの考えは口調からなんとなく分かる。一緒に過ごし

た時間は短いけれど、こういうのが夫婦というものなんだろうか？

母との電話を終えてお風呂に入り、ベッドの上でスマートフォンを弄る。

お風呂上がりのわたしが着ているのは、お気に入りのパイル生地でできたパーカーとハーフパンツのパジャマ。薄ピンクに灰色の横線が入ったもので、子供っぽい気もするけど、わたしはまだ十六歳だしお子様だから良いのだ。

大人の色気を求められても困るし、着心地と可愛らしさが今は一番。

わたしとは対照的に、コゲツの寝間着は着物。多分浴衣だろうけど、よく似合っているから大人だなぁと思う。

「事件……事故」

スマートフォンの小さな画面でニュースの記事を読む。わたしの最近の日課だ。

『行方不明』――この文字にドキッとしてしまう。

千佳のことではないかとざっと目を通し、彼女の名前がないことにホッとする。

「んーっ、目がショボショボする……」

スマートフォンの電源を落とし、大きく伸びをしてから一階へ下りた。

台所で紅茶を淹れて、砂糖とミルクをたっぷり入れる。夜にこの飲み物はカフェイ

ンやカロリーを考えると暴力的な感じもするけど、明日は学校が休みだし、砂糖の入れ過ぎを困った口調で注意するコゲツも今は留守。

紅茶に砂糖を控えるという選択肢は、ない！

「ふふふっ、甘いミルクティーはダージリンに限る」

アッサムのほうが渋みがないのでミルクティーには最適と言われているけれど、砂糖をたっぷり入れるなら、渋みのあるダージリンが良い。と、わたしは思う。

いつもならここで「嫁殿、寝る前のカフェイン摂取はどうかと思います。砂糖も入れ過ぎです」と、窘めるコゲツの声がかかるのだ。

「そういえば、コゲツってば『嫁殿』呼びで定着しているのよねぇ……」

他人行儀に感じるから、ミカサと名前で呼んでほしい。

以前にそう伝えた時、コゲツは「名は奪われては困るものだから」と、訳の分からないことを言っていた。

うちの一族は名前を漢字とカタカナとで使い分けているから、それも関係しているのかもしれない。子供が生まれた時には漢字を付けるが、普段の生活で使われるのはカタカナ。結婚相手にだけ、漢字を教える習わしだ。

わたしは『美嘉沙』という漢字が付けられていて、結婚したコゲツは知っている。
それ以外の他人に教えていいのはカタカナの『ミカサ』だけだと、口を酸っぱくして言われていた。
わたし自身、『嘉』の字を書いたことがないから、ちゃんと書けるかも怪しいところだ。
それと、人の名前を呼ぶ時には、相手の顔を思い浮かべながら漢字をイメージしてはいけないと言われている。
変な習わしだけれど、一族間でそう言い続けられているので、今更逆らうつもりもない。おかしな風習だとは思うけど。
コゲツの漢字も結婚した時に教えてもらった。
漢字で『虎結』。
自分の名前と同様、『虎』の字を書き慣れていないから、書けと言われても書ける自信はない。
「コゲツ、遅いなぁー……」
甘いミルクティーを口に含みつつ、時計を見ると二十二時を過ぎていた。

いつものコゲツなら一時間前には「嫁殿、早く寝なさい」と言ってきて、わたしは「まだ早いよー」と文句を垂れている。この時間にはコゲツ自身も早々に寝入っている頃だから、仕事に時間がかかっているのだろう。
「んーっ、甘い！　だが、それが良い」
一人で過ごす家はなんだか静かすぎて、意味もなく独り言が多くなる。
証拠を隠滅するつもりでミルクティーを飲み干そうとして……あと半分というところで、玄関のドアがドンドンドンと、三回叩かれた。
大きな音に驚いて、座った爪先が少し宙に浮いた。慌てて玄関へ行く。
玄関に手をかけようとした時、耳元で「嫁殿！」とコゲツの声が聞こえた気がして、手を引っ込める。
後ろを振り返ってももちろんコゲツの姿はない。
気が急いて早く戸を開けないとと思ってしまったけれど、この夜更けに訪ねてくる人というのも、普通に怪しい……？
「どちら様ですか？」
この時間にセールスや新聞勧誘だったら、常識がなさ過ぎてクレーム案件だ。

絶対に玄関は開けないんだからね。
わたしの応答を受けてか、ドンドンドンと、また戸が叩かれる。
「どちら様ですか！　名乗らないなら警察を呼びますよ！」
再びドンドンドンと三回叩かれ、気味の悪さに後退った。
その後もドンドンドンと規則正しい音が繰り返される。わたしは完全に戸を開ける気が失せていて、玄関から離れても変わらず三回響く音に恐怖を覚えていた。
二階に上がってしまおうか……でも、一階から侵入されたらどうしよう？
そう考えると不安で、二階に上がることもできない。
「スマートフォン……二階だ……」
こんなことになるなら、スマートフォンを持ち歩く癖をつけておけば良かった。
武器を持つべきだろうか？　そう考えて台所で包丁を手にしたものの、これは流石に危険すぎると首を横に振る。
相手は不法侵入者とはいえ、下手をすれば自分も殺人を犯してしまう。
結局わたしが手に取ったものは、フライパンである。
相手がナイフを持っていても、フライパンなら防御もできるはず！　こちらからの

攻撃も、打撃ならば致命傷にはならない……かもしれない、多分。
わたしがフライパンを手に持って居間に陣取っている間も、戸は規則正しく三回ずつ叩かれている。恐怖で心臓はバクバクしっぱなしだった。
「うーっ、なんで……こんな時にコゲツがいないのよ～っ」
泣き言を吐きながらも、コゲツが帰ってきたら紅茶のシフォンケーキを作ってもらおう、ホイップは山盛りで！　と、幸せなことを思い浮かべて恐怖から逃げていた。
部屋の隅っこで膝を抱えて籠城する――
「――嫁殿。こんなところで寝ては、風邪をひきますよ」
コゲツの声に目を開けると、いつの間にか寝ていたらしい。わたしの傍らにはフライパンがあるので、不審な来客があったのは夢ではないだろう。
カーテンの閉まった室内はまだ薄暗い。わたしが寝てからそれなりに時間が経ったのかもしれない。
「……今、何時？」
「朝日が昇る手前というところです」

「……コゲツ、帰ってくるのが遅い」
「それは悪かったと思っています。私の帰りを待っていてくれたのですか？　でも、ちゃんと自分の部屋で寝ないと駄目ですよ」
嬉しそうな声には申し訳ないけれど、コゲツの帰りを待っていた訳じゃない。
まぁ、早く帰ってきてほしいとは思ったけど……
「ここで寝たくて寝た訳じゃないもの」
コゲツはふと足元のフライパンを拾うと、わたしに向かって少し首を傾げた。
何をしていたんだ？　という怪訝さが滲んでいるけれど、これにはれっきとした理由があるのだ。
「あのね、玄関の戸を叩き続ける人がいたの！　すっごくしつこくて、怖かったの！」
「この家の玄関を？」
「本当だよ！　ここ、お隣さんの家も遠いから、間違いなくうちの家だよ！」
わたしが言い終わるや否や、コゲツはフライパンをちゃぶ台に置くと、玄関へ走り出した。わたしもコゲツの後を追い、靴を履いて玄関を出る。
朝日が薄っすらと辺りを明るく照らし始めている。

「――ヒッ！　何、それ……」
玄関のガラス戸には、赤黒い手形が三つ付いていた。
「三度参り……嫁殿、玄関を開けてはいませんね？」
わたしはブンブンと勢いよく頭を上下に振る。気持ちの悪さに、胃の上がキュッと縮こまった感じがした。
コゲツはジャケットの内ポケットから白い袋を出すと、中の白い粉を玄関前に撒いた。
「何を撒いたの？」
「これは清め塩。……嫁殿、顔色が悪いですよ。大丈夫ですか？」
「大丈夫じゃなーい！　夜中にドンドン叩かれるし、こんな悪戯されてるし!?」
わたしがワッと騒ぐと、コゲツが慰めるようにわたしの頭を撫でる。
撫でられても誤魔化されないのだけど？　嫌がらせにしては度が過ぎている！
涙目になったわたしの目元を、コゲツが指で拭う。
こんな時なのに、思わずドキッと胸が飛び跳ねて頬が熱くなった。
「嫁殿は、怖がりな性質ですか？」

「怖がりとかの話じゃないよ！　警察に連絡して、犯人を捕まえてもらわないと安心できないよ！」
「それは無理だと思いますが……」
「なんで無理なの？　コゲツは犯人に心当たりがあるの？」
コゲツが「玄関を見れば分かります」と言って、ガラス戸を指す。その誘導に従ってそちらに目を向けて、わたしは言葉を失った。
朝日の光で照らし出された玄関には――何もなかった。
赤い手形は、綺麗さっぱり消えている。
狐に化かされたような気分と言えばいいのだろうか？　先ほどまであんなにクッキリと付いていたのに。
コゲツを見上げると、困ったような様子だ。
「どういうこと？　三度参りって、なんなの？　こんな悪意のあることをされるって、お礼参りされちゃうような悪いことをしたの？」
「喧嘩のたぐいで言う『お礼参り』じゃありませんよ。嫁殿、とりあえず家に入りましょう。温かい飲み物でも淹れますから、落ち着いてください」

「落ち着けって言われても、手形はどこに消えたの？　悪戯のジョークグッズだって言うの？」
背中を押されて家の中に入り、コゲツに手洗いとうがいを言い渡された。
ほんの少ししか外に出ていないのにとは思うけど、習慣で素直に従ってしまう。
居間に戻ると、ホットミルクの入ったマグカップがあった。
「留守にすると、嫁殿はすぐ砂糖だらけの紅茶を淹れますからね。これで我慢してくださいね」
「むぅ……って、これ、甘い。ハチミツ？」
火傷をしないようにチビチビと飲んだホットミルクから顔を上げると、コゲツが頷いた。
証拠を隠滅するはずだった昨夜のミルクティーは半分残ったまま台所に取り残されていて、コゲツが「まったく、油断も隙もないですね」とコップを洗って戻ってきた。
甘い物は女の子には必需品なのになぁ……。完全犯罪は難しい。
「三度参りについて説明しましょうか」
「ホラーっぽい話？」

コゲツは小さく頷く。

わたし、ホラーもオカルトも苦手なのだけど……

「三度参りは、三回ドアを叩き、それを三回繰り返します。家に人払いの魔除けを施していても、家人がドアを開ければ入られてしまいます」

「あー、確かに三回叩いてた！　規則正しく三回！　でも、人払いの魔除けって？」

「我が家には、人払いの魔除けが施してあります。嫁殿は、玄関に触れた、もしくは声を出して反応しましたか？」

「あ……うん。警察を呼ぶぞって騒いじゃった。駄目だった？」

普通の不審者なら、警察の名前を出せば引くはずだ。

でも、相手はそれでもしつこく叩き続けていたから、警察が怖くなかったみたい。それじゃあ極悪非道な不良……って、不良が仕返しする時の『お礼参り』じゃないって、言っていたっけ。

「ふむ。嫁殿が反応したことで、戸を開けるまで叩き続けようとしたのでしょうね」

「警察を呼べば良かった……」

「それは止めておいたほうがいいでしょう。呼んでいたら今頃、警察の遺体が転がっていたかもしれません」

「うー……さっきから、コゲツはわたしを怖がらせようとしてるの？　物騒なんだけど！」

これ以上のオカルト話は嫌だと、マグカップをちゃぶ台に置いて両耳を塞ぐ。

コゲツは何も言わずにわたしの肩を手でポンポンと叩き、居間を出ていった。

怖がりだと呆れられてしまっただろうか？

でも、仕方がないじゃない？　玄関を何度も叩かれた上に、血のりで手形を付けられて、挙句、コゲツにもオカルト話のようなことを聞かされたのだから、怖がるなと言うほうが無理というものだ。

「嫁殿」

机の上のマグカップに視線を落としていると、コゲツが戻ってきた。

「今日も出掛けなくてはいけません。ですから、これを肌身離さず持っていてください。そうすれば、怖いことはないですから」

そう言って、コゲツは小さな紫色のお守り袋をくれた。親指の爪ぐらいの何かが中に入っているようで、爪先でつつくとコツコツと軽い音がする。

立ち読みサンプルはここまで